

Fouquier, Marcel

Paris au XVIII^e siècle ; ses folie.

Paris, Emile-Paul, 1912. (文献番号11-123)

フーキエ著

18世紀のパリ；フォリー

1912年、マルセル・フーキエがパリで発行した「18世紀のパリ」の第1部にあたる本書は、〈フォリー〉、即ち〈娯楽のための家〉をビジュアルに説明する絵図をふんだんに挿入した豪華本である。アルシュ (Arche) 紙版で550部限定出版であった。

タイトルとなった〈フォリー〉とは、18世紀末に楽しみ、娯楽（その多くの場合、恋愛に関する楽しみであったが）のために建てられた、小さな優雅な邸宅について用いられる語であり、folie 本来の意義〈気まぐれ、変わった趣味〉の色濃い美しい家のことである。18世紀末、革命後のパリで、王族・大領主・財産家・成金たちが競ってこのフォリーと呼ばれるしょうしゃ（瀟洒）な家を建築したのであり、その後、フランス各地からヨーロッパへとこの流行が広がっていった。

フランス史上栄光の18世紀については、既に様々な角度から研究がなされているが、パリのフォリーは、その中でほとんど取り上げられることのなかった題材であった。なぜなら、この題材が、あまりに軽薄なものと思われていたからであり、さらにまた、フォリーに関する資料が大変少なかったためであったが、こうした悪条件にもかかわらず、著者はあえて優雅ではない18世紀末の生活の中に存在した、この興味深い題材を紹介しようと試みたのである。

本書は、二つの異なる側面からアプローチされている。第I部は62の具体例について、フォリーの建築学的な考察、すなわち、外観、プラン、内外部の装飾及びそのモチーフ、庭などの観察。第II部はフォリーが建てられることとなった当時の社会風俗についての分析である。また巻末には二つ折りのパリの地図が付されている。

建築学的見地から18世紀後半の趣向は、前世紀のルイ14世時代に好まれた、壮大な列柱に囲まれた建築物とその中の豪華なサロン・舞踏場から、よりコンパクトでより快適な間取りを持つ、凝った造りの邸宅へと移っていき、この時、フランス建築史上、特異な光をはなつフォリーが生み出されたのである。この粋を凝らしたプライベートな邸宅・フォリーの中で当時の有名な人物とあてやかな女性たちが語り合い、また時には大事件のプレリュードともなった政治論がたたかわされたのであった。アルコールでは甘い恋歌が作曲され、サロンでは精神的な演劇が初演された。官能の喜び、感性の楽しみを第一とし、もはや信仰にさえ支配されることのない自由な思想を持った当時の社会の様々な風俗が、フォリーの中に鮮明に映し出された。それゆえ、本書はこのフォリーの建築的興味を明らかにすると共に、フォリーを通じてのフランス史を知ることとしても興味深い。なお、作者フーキエについての詳細は分らない。